

平成 22 年 5 月 13 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2009

課題番号：19520700

研究課題名（和文）

瀬戸内海島嶼部における「自然と直接出会う生き方」と自律的「地域システム」

研究課題名（英文）The way of life in the direct encounters with the natural environment and the autonomous regional systems in the islands of Setonaikai

研究代表者

北村 光二（KITAMURA KOJI）

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授

研究者番号：20161490

研究成果の概要（和文）：瀬戸内海島嶼部における生活世界の特徴として本研究が想定した、「自然と直接出会う生き方」と「自律的な地域システム」の二つは、世代を超えて継承されてきた生業活動のみならず、島での暮らしに肯定的な意味や価値を見出そうとする活動に顕著になることが明らかになった。それは、政治的・経済的領域における「本土」への従属の進行のもとで、自らの「存在証明」の必要性をより強く意識するようになったことに連関した事象であると考えられた。

研究成果の概要（英文）：In this study, we intended to analyze the everyday life in the islands of Setonaikai, with the focus on the way of life in the direct encounters with its natural environment and the autonomous regional system. We have clarified that these traits were found not only in the surviving activities in its natural environment succeeded through many generations, but also activities in which islanders tried to perform for the sake of finding their regional life significant and valuable.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学・「文化人類学・民俗学」

キーワード：瀬戸内海、島嶼地域、白石島、生業活動、地域システム、自律性、本土、存在証明

1. 研究開始当初の背景

(1) 申請者は以前より、東アフリカ牧畜民の社会変動についての人類学的研究を行っ

てきたが、その中で、自律的な地域システムにおける自然環境と人間の関係に基本的なこととして「体験の受動性」に注目するとい

う観点が重要だと考えるに至り、「体験の受動性」が顕在化する「自然と直接出会う」という生き方についての理解を深めたいと考えるようになった。

(2) その際、牧畜以外の生業に従事する社会を対象にした比較研究を進めることにより、このようなアプローチの有効性を明らかにするとともに、地球温暖化への対応において注目される持続可能な地域システムを具体的に検討することを試みたいと考えた。

2. 研究の目的

本研究は、古くからそれぞれの島ごとに、周囲の自然環境との直接的な関係づけを基本とする自律性の高い「地域システム」と独自の生活文化を築いてきた瀬戸内海島嶼部を対象として、産業化の進展と農・漁業の衰退、過疎化・高齢化の進行という大きな歴史の変動にさらされながら、この地域システムと生活文化がどのようなものに変容しつつ生き残っているのかについて明らかにしようとするものである。

本研究では、文化人類学を中心に、社会学、経済地理学的手法を用いた、現地における直接観察と聞き取り調査に基づいて、この地域に暮らす人々の生活世界を総合的に解明することが目指されるが、それによって、都市生活者の視点からも高い価値が与えられるはずの「自然と直接出会う生き方」や「自律的な地域システムに根ざした生活」という側面がどのような形で息づいているのかを具体的に明らかにできると考えられる。

3. 研究の方法

(1) 社会的・経済的周縁化をもたらす構造的な前提と現状の把握

- ・地理的・経済的な構造的な前提と現状の把握
- ・行政的・社会的な構造的な前提と現状の把握
- ・生業の現状の把握

(2) 生活世界の歴史の変遷にかかわる事実の集積

- ・生業構造の歴史の変遷に関わる事実の集積
- ・ライフヒストリー法を用いて、個々人の「生活の変遷」についてのデータの集積を進め、それぞれの島ごとの生活史を再構成する
- ・戦前の自給的生活システムにもたらされた変容の過程を再構成する

(3) 「自律的な地域システム」を支える人々の「選択」についての質的データの集積

- ・観光事業への取組
- ・高齢化問題への取組
- ・「地域システムの持続可能性」への取組

(4) 他地域の島嶼社会との比較

・笠岡諸島以外の瀬戸内海地域や、沖縄県、西太平洋(パラオ共和国、ミクロネシア連邦)の島嶼社会との比較を行い、島嶼社会に共通する特性とそれぞれの独自性についての把握を進める

4. 研究成果

本研究では、瀬戸内海島嶼部における人びとの生活世界の特徴を、都市生活者の視点からも高い価値を与えられるはずの「自然と直接出会う生き方」と「自律的な地域システムに根ざした生活」という側面に焦点を当てて解明することを目指したが、岡山県笠岡市の白石島におけるインテンシブな現地調査を継続しつつ、瀬戸内海の他の地域や沖縄県、西太平洋の島嶼社会との比較研究を進めることにより、白石島をはじめとするそれぞれの社会が抱える課題と展望について明確な把握が可能になり、とくに島嶼社会における「本土」の重要性を明らかにすることができた。

(1) 社会的・経済的周縁化をもたらす構造的な前提の把握：市役所をはじめとする行政機関や社会組織への聞き取りや統計資料から、社会的、経済的な構造前提や現状についての把握を進め、白石島における農業、漁業、石材業、旅館業等の産業基盤に関わる現状を現地調査にもとづいて把握した。

(2) 歴史の変遷にかかわる事実の集積：ライフヒストリー法を用いて、特に、地域的な移動と職業変遷についてのデータの集積を行った。また、白石島における生活のあり方の変遷を、戦前の自給的生活、高度経済成長期以前と以後という3期に分けて、生業構造、年中行事、教育、観光等の項目ごとに把握した。

(3) 「自律的な生活システム」を支える人びとの「選択」についての質的データの集積：明治期の山林買収阻止の運動、1960年代の秋祭りの盛大化、白石踊りの伝承の試みのそれぞれについて、そこにある人びとの「選択」を可能な限り詳細に追跡した。それによって、これらの「住民が主体となった取り組み」の成功例においては、運動のプロセスを通して、個々人のばらばらの意見がすべての「島の人間」としての問題という枠組みのもとに整理され、たとえ具体的な対応策に関して賛成派と反対派に分かれることになったとしても、そこには「島の人間」というまとまりがしっかりと形成されて、問題の共有が実現されていたことが明らかになった。

(4) 白石島の地域活性化の取り組みにおける「本土」への依存：観光事業や高齢化問題への取り組み等、地域活性化の活動は、組織上は、住民によって自発的・主体的に取り組みされていることになっているが、実態としては、「本土」側の行政の主導による活動にな

っている。ただし、その一方で、島民が自分たちの地域での暮らしに肯定的な意味や価値を見出すことに結びつくはずの活動に目を向ければ、島全体を巻き込む伝統芸能の継承の運動や島の祭りの維持への試みなどがあり、それらは世代を超えて継承されてきた生活実践とともに、地域システムの持続可能性を考える上でより重要な位置づけを与えられるべきものになっていることが明らかになった。

(5) 他の島嶼社会との比較研究：パラオ共和国バベルダオブ島もミクロネシア共和国ヤップ島も、大陸からは隔絶した太平洋上にある島で、伝統的にはほぼ完ぺきな「自律的な地域システム」を構成・維持してきたといえるが、近年はグローバル化の波に飲み込まれて、急激な社会変容を経験している。今年度の調査によって、それぞれの地域での生活の基本には、地域の資源に依存した自給自足的な生活がいまだに維持されているという状況ある一方で、家族の海外移住やその移住先からの仕送りの重要性の高まりとともに、生活文化そのものの「本土」への依存という状況が生み出されてもいることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 8 件)

①北村光二、「人間の共同性はどこから来るのか? : 集団現象における循環的決定と表象による他者分類」、『集団：人類社会の進化』(河合香吏編、京都大学学術出版会) 査読無、2009、pp.39-56.

②北村光二、「白石島の生業の変遷」、『社会調査報告書 - 白石島』査読無、2009、pp.43-44.

③北川博史、「離島における漁業の構造変化 - 香川県直島を事例として」、『社会調査報告書 - 白石島』査読無、2009、pp.132-143.

④小林孝行、「白石島における高齢者医療・福祉の概要」、『社会調査報告書 - 白石島』査読無、2009、pp.85-86.

⑤北村光二、「『社会的なるもの』とはなにか? : 他者との関係づけにおける『決定不可能性』と『創造的対処』」、『霊長類研究』査読有、2008、109-120.

⑥北村光二、「コミュニケーションの生態学に向けて(2)」『岡山大学文学部紀要』第 49 号、査読無、2008、1-11.

⑦北村光二、「世界と出会うという生き方：『東アフリカ牧畜民』的独自性についての考察」、『生きる場の人類学 - 土地と自然の認識・実践・表象過程』(河合香吏編、京都大学学術出版会) 査読無、2007、pp.25-57.

⑧北村光二、「コミュニケーションの生態学に向けて(1)」、『岡山大学文学部紀要』第 47 号、査読無、2007、pp.25-45.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北村 光二 (KITAMURA KOJI)

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授

研究者番号：20161490

(2) 連携研究者

小林孝行 (KOBAYASHI TAKAYUKI)

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授

研究者番号：70112274

北川博史 (KITAGAWA HIROFUMI)

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・准教授

研究者番号：20270994